



TITLE:

『三國史記』の板刻と流通

AUTHOR(S):

田中, 俊明

CITATION:

田中, 俊明. 『三國史記』の板刻と流通. 東洋史研究 1980, 39(1): 63-99

ISSUE DATE:

1980-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153771>

RIGHT:

『三國史記』の板刻と流通

田 中 俊 明

はじめに

- 1 李朝中宗七年壬申の板刻
 - 2 李朝太祖三年甲戌の板刻
 - 3 李朝時代における流通と顯宗實錄字本
 - 4 高麗時代における板刻と流通
- おわりに

(本文・註を問わず、引用文中の傍點・傍線、……による省略および()・「」による補足は、特に斷わらない限り、筆者によるものである。また高麗・李朝の年代は全て踰年稱元に從った。)

はじめに

『三國史記』が朝鮮における現存最古の歴史書であり、朝鮮古代史を研究する上においても最も基本的な史料であることは、今さら贅言を要さない。しかしそのテキストについては、解題・解説の類でふれられる以外、正面から論じられることは殆どなかった。それは、ほぼ完全な形で今に傳わる最古のものがいわゆる「正徳本」と知られ、それを影印したものが一般に用いられているという事情から、ことさら問題とするに足らなかつたのかもしれない。しかし、研究者にとっては、使用するテキストがどのようなものであるかは、閑却できない重要な問題であるといえる。そこで小稿においては、テキスト板刻の経緯に問題をしばって、一應の史料の収集・整理を行ない、あわせて流通の一端を窺うこととした。

今後の『三國史記』利用者にとって、いくらかでも資するところがありとすれば、幸いである。

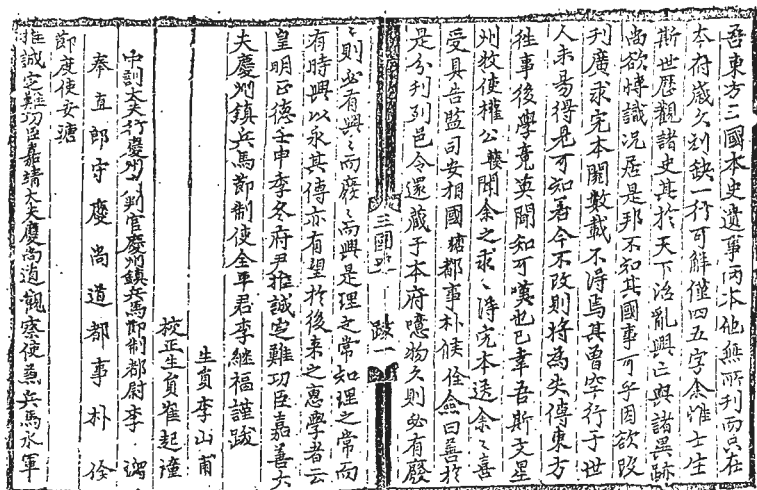
1 李朝中宗七年壬申の板刻

いま私たちが普通に用いている『三國史記』のテキストは、「學東叢書」第一として學習院東洋文化研究所から刊行されたものか、^①「韓國古典叢書」2として民族文化推進會から發行されたものであり、いずれもかつて（一九三二年）慶州玉山李氏本をほぼ原寸大に影印した古典刊行會本を、再度縮小して影印したものである。^②これらの原本である玉山李氏本は、一般に「正徳本」とよばれている。正徳とは明の武宗の年號で、正徳年間、正確には正徳壬申に刻成された板木によって刷られたもの、ということである。そこでまず、通行本というべきこの正徳壬申刊本の板刻についてみていくことにする。ただし正徳壬申は李朝では中宗の七年（一五二二）であり、以下これを中宗七年刊本と稱する。^③

ところで玉山李氏本には、卷末に、「至甲戌夏四月告成」（甲戌は李朝太祖三年。次項参照）と記す金居斗の跋および官衙（あわせて刊記とする）を附すのみで、これが中宗七年刊本であることを示すものは何もない。^④従って、その限りでは、太祖三年刊本とみるのが自然かもしれない。しかしこの官衙には、後述するように誤刻がみられるため、太祖三年の刊記そのものではなく、後代（恐らく中宗七年）の覆刻とみたほうがよいと考えられる。

では中宗七年の板刻の経緯は何によって知ることができるかという点、同じく「正徳本」とよばれる『三國遺事』^⑤の卷末に附す李繼福の跋および官衙（あわせて刊記とする）によってである。これは、『三國遺事』の卷末に附すといえ、書き出しに「吾東方三國本史・遺事兩本」とあるように兩書に對するものであり、さらに注目すべきことは、その板心に「三國史 跋」とあることである（圖版1参照）。^⑥従って『三國史記』の刊記としてみてもさしつかえなく、これによって中宗七年の板刻について考えることができるのである。^⑦

その李繼福跋は次の通りである。



圖版1 中宗七年刊本・李繼福跋（「學東叢書」本に據る）

吾東方三國本史・遺事兩本、他無所刊、而只在本府、歲久剝缺、一行可解僅四五字、余惟士生斯世、歷觀諸史、其於天下治亂興亡與諸異跡、尙欲博識、況居是邦、不知其國事、可乎、因欲改刊、廣求完本、閱數載不得焉、其曾罕行于世、人未易得見可知、若今不改、則將爲失傳、東方往事、後學竟莫聞知、可嘆也已、幸吾斯文星州牧使權公轅、聞余之求、得完本送余、喜受、具告監司安相國璫・都事朴候倫、余曰善、於是分刊列邑、令還藏于本府、噫物久則必有廢、而廢、而與、是理之常、知理之常、而有時興、以永其傳、亦有望於後來之惠學者云、

皇明正德壬申季冬、府尹・推誠定難功臣・嘉善大夫・慶州鎮兵馬節制使・全平君李繼福謹跋

これにつづけて、次のように官銜を記す。

生員 李山甫
校正、生員 崔起瀟
中訓大夫・行慶州府判官・慶州鎮兵馬節制都尉 李 瑠
奉直郎・守慶尙道都事 朴 倫
推誠定難功臣・嘉靖大夫・慶尙道觀察使・兼兵馬水軍節度使 安 瑯

みられるように、中宗七年の板刻事業の中心人物は、跋を記した李繼福である。彼は慶州府尹（長官）であった。慶州府の歴代の府尹・判官（次官）を記した『慶州先生案』には、

推誠定難功臣・嘉善大夫・慶州府尹・慶州鎮兵馬節制使・全平君李繼福庚午九月十七日到任、癸酉三月二十五日、上護軍去とある。また行判官の李瑠についても、

朝奉大夫・行慶州府判官・慶州鎮兵馬節制都尉李瑠庚午十二月十二日到任、乙亥十月日、工曹正郎去

と記す。いっぽう慶尚道觀察使安瑋と守都事朴佺については、『慶尚道營主題名記』に、

觀察使・推誠定難功臣・嘉靖大夫・兼兵馬水軍節度使・順興君安瑋正徳七年壬申五月初一日、順興君來、癸酉六月同職去、永樂二年甲申觀察使安瑋孫、永樂二十一年癸卯都事朴融外孫

都事・承議郎朴佺壬申五月三十日、兵曹正郎來、癸酉六月承文院校理去

とある。ここでこれらと刊記の記載との異同をみると、表1のようになる。

表1 『慶尚道營主題名記』・『慶州先生案』と中宗七年刊記との異同

記號	人名		題名記・先生案	刊記
イ	朴 佺		都事	守都事*
ロ			承議郎	奉直郎
ハ	李 瑠	朝奉大夫	中訓大夫	

*跋文中では「都事」

ロ・ハの文散階の違いは、ロが承議郎（正六品）と奉直郎（從五品）、ハが朝奉大夫（從四品）と中訓大夫（從三品）であるから、いずれかの誤りというよりは、ともに着任してから刊記が書かれるまでの間の進階とみるべきであろう。イは、刊

記の中でも、官銜に「守都事」とあるのに、跋文中では「都事」となっており、後者は省略とみられるから、『題名記』も同様に、省略とみておきたい。^⑤従ってこれらの異同はいずれも問題になるものではない。そこで、これらによって、中宗七年の板刻の経緯を次のようにいうことができる。

中宗五年庚午（二五二〇）九月に府尹として慶州府に着任した李繼福は、慶州府に藏する兩書の板木が、磨滅が甚しくて一行のうち僅か四・五字しか解せない、という状況をみて嘆き、「改刊」を企てた。そこで廣く完本を求めたけれども得なかった。そのうち星州牧使の權轅が、彼の求めを聞いて完本を得、それを送ってよこした。この間「閱數載」としてはいるが、實際には二年足らずである。完本を得た李繼福は、觀察使安瑋と守都事朴倫に告げた。それはもちろん、彼らが着任した中宗七年壬申（二五二二）五月（特に朴倫着任の三〇日）より以後のことでなければならぬ。そして「善」と快諾されたので、列邑即ち慶州府内の諸邑に分けて板刻させ、同年季冬（十二月）までに完成した、というわけである。刻成に要した時間は、崔起潼・李山甫による校正を含めても、せいぜい六箇月ということになる。

ここで少し補足をしておきたい。まず、權轅が送ってよこした「完本」とはどのようなものであっただろうか。李繼福が求めたのは、文脈上恐らく、府に藏する板木、即ち太祖三年に刻成した板木（後述）によって、それが磨滅する以前に刷られた「完本」であろうが、權轅が送ってきたものが必ずしもそれとは限らないからである。しかし金居斗の刊記を保存していることから考えれば、^⑥やはり李繼福が求めていた通り、磨滅する以前の太祖三年刻板によって刷られたものと考えてよいであろう。

李繼福はその「完本」を基にして校正させ、それを書寫して板下として、列邑に分刊させた、ということになる。そこで次にこの「改刊」について、より具體的に考えてみたい。

その手掛りの一つは、卷五の第一葉から卷七の第一葉までの殆どの葉の板心の前後一・二行の下半に、缺字・墨格がみられることである。^⑦これは、李繼福の得た「完本」のその箇所破損があったか、あるいはその「完本」に既にこのよう

な赤字・墨格があったか、いずれかによるものであろう。そこでまず問題となるのは、この赤字・墨格が一樣に、板心附近にみられるという事実そのものである。線装本が一般に板心の附近（小口）から破損しやすいことはよく知られるところであり、例えば玉山李氏本にしても、卷二六の第二葉から第一〇葉（末葉）までの九葉にわたって、板心の前後を破損しているのである。従って当該の卷五〇巻七についても同様に、かつて板心の附近を破損したのであろうと想像できる。その破損がいつの事であるかはともかく（後述）、少なくとも中宗七年刊本は、破損した時と同じ行數・字數（毎行）であることは間違いない。なぜならば、行數や字數を變えれば、赤字・墨格の箇所が、當然板心から離れる場合が生じるからである。要するに、この「改刊」は、行數・字數といった體裁については、先の板をそのまま踏襲したことが明確である、といえる。

次に生員崔起渾と李山甫とによる校正について考えたい。これについてもやはり右記の赤字が手掛りとなろう。例えば卷五の第三葉は

…於是高句麗百濟高□□□蕃亦遣子弟入學（善德王九年條）

となっているが、これは『資治通鑑』などによって「高」の次が「昌」であり、「蕃」の前が「吐」であると推定できるものである。また第六葉の赤字の一つは

〔金〕庾信自伐百濟還未見王百濟大軍復來寇邊王命□□遂不至家往伐破之斬首二千（善德王一四年條）

というものであるが、前後の内容からも、同じ『三國史記』の金庾信傳の記事からも、「命」の次が「庾信」であると推定できる。このように、校勘によって容易に補い得る赤字を、ここでは補っていないのである。従って生員二人の「校正」とは、「完本」の文字を正しく読みとることであった、という程度に考えるべきであらう。ただし視點をかえれば、これは「完本」で讀めない文字はそのままとしておくという、慎重な態度をうかがわせるものといえる。

そこで最後に、刻字についてもう少しみておきたい。例えば卷一の第一四葉、右四行に「冬十月棋李華」とよめる記事

があるが、この「棋」は「桃」であろうし、卷二の第四葉、左二行の「第二十伊買」とよめる部分の「十」は「子」であろう。また卷六の第九葉、左八行の「大角千金庾信」という箇所「千」は明らかに「干」であり、卷八の第八葉、右五・六行の「先天中敗焉」とよめる「敗」も「改」であろう。こうした例は数多く、枚舉にいとまがないが、いずれも知識をもつてよくみれば、正しくよめないこともない。これらは、板下を書寫する際に誤ったものか、あるいは刻手が誤ったものであるか不詳であるが、いずれにしても意圖的な改字ではなく、文字をあまり知らずに機械的に書寫した、または雕つたために生じたとみられ、その責任は「校正」者にあるというべきかもしれない。そのことは、次のような例に、よりはつきりとあらわれている（圖版2参照）。

(1) 大驚遣將軍金純具針天存竹旨濟師救援至

(2) 即能津道斷絕於鹽鼓即募律兒俞道送鹽救

(3) 三年春二月以順知爲中侍納一吉滄金欽彈

圖版 2

(1) 卷五、第一九葉左三行、第九字「針」

(2) 卷七、第六葉左三行、第十二字「律」

(3) 卷八、第三葉左三行、第一八字「彈」

これらは文章内容から判斷して(1)「欽」(2)「建」(3)「運」とあるべきところであるが、(1)は高麗第九代德宗、(2)は初代太

祖（王建）、(3)は第一三代宣宗のそれぞれ諱であるため、それを避けて缺筆した形(1)「鈐」(2)「痺」(3)「渾」が原形であったとみられる。④。そうした事情を知らず、機械的に書寫し、あるいは雕ったため、右のような字形となったのであろう。⑤。しかしこうした稚拙さがかえって、先の板の原形を伝える結果になっているといえなくもない。⑥。また卷一二、新羅本紀第一二や卷五〇、列傳第一〇、弓裔・甄萱に「太祖」・「我朝」という文字があらわれるたびに改行しているのがみられるが、これも原形を伝える例といえよう。

以上中宗七年の「改刊」について總じていえば、その底本となった太祖三年刊本に對して、板式や内容において殆ど改變を加えず、どちらかといえばその再現をめざした、といえるくらいのものであったと考えられる。

2 李朝太祖三年甲戌の板刻

それでは次に、中宗七年の改刊に際してその底本となった、金居斗らによる太祖三年の板刻についてみていきたい。中宗七年刊本の卷末に附す金居斗跋は次の通りである。

三國史印本之在雞林者、歳久而泯、世以寫本行、按廉使沈公孝生得一本、與前府使陳公義貴、圖所以刊行、於癸酉七月、下牒于府、八月始鋟諸梓、未幾二公見代、余以其年冬十月至府、承觀察使閔相公之命、因繼其志、乃助之施、令工不斷手、至甲戌夏四月告成、嗚呼指揮能事、以至於成、惟三公是賴、余何力之有焉、但具事之終始、書于卷末耳、府使・嘉善大夫金居斗跋

また、こちらは跋の前に、官銜を附す。

府使・嘉善大夫・兼管内勸農防禦使

權知經歷・前奉正大夫・三司左咨議

嘉靖大夫・慶尙道都觀察黜陟事・兼監倉安集轉輸勸農管學士提調刑獄兵馬公事・同樞院事

臣金居斗

臣崔得罔

臣閔 開

さて、この跋にみえる癸酉・甲戌を特定するのは先にもふれた『慶尙道營主題名記』であり、その「我太祖康獻大王即位、壬申」とある次の行に、

十月日、按廉副使・兼黜陟・安集監倉轉輸管學勸農使提調刑獄兵馬公事・翊戴開國功臣・保功將軍・千牛衛大將軍沈孝生

一行おいて、

癸酉十月日、都觀察黜陟使・嘉靖大夫・兼監倉安集轉輸管學事提調刑獄兵馬公事・同知中樞院事閔開

經歷・前奉正大夫・三司右咨議崔得岡

とみえている。^⑧これによって太祖代の癸酉・甲戌即ち二年癸酉（一二九三）・三年甲戌（一二九四）であることがわかるのである。刻成は甲戌であるから、太祖三年刊本とする。

ここでも先と同様に、これらと刊記の記載との異同をみておきたい（表2）。

まずイについてであるが、太祖元年二月および二年三月の時點で、沈孝生が按廉使であったことを確認できる。^⑨『營主題名記』の記載をも生かすとすれば、副使として着任し、まもなく正使となったとみればよいであろう。ハは、『營主題名記』の記入もれとみられる。ホは、もちろん『營主題名記』が正しいのであるが、刊記の單なる省略とみてよい。ヘは、問題は残るが一應『營主題名記』の省略とみておく。^⑩トも兩者を生かして、右咨議から左咨議へ遷ったとみられなくはないが、いずれかいつぼうの誤りとするのが、無理がなさそうである。以上、ロ・ニを除けばいずれも、それ自體としてはおかしくはなく、ただ異同があるために問題が生じる、というものである。しかしロ・ニは、官銜の記載が、それ自體として既におかしいものである。『營主題名記』にみえるような正しい職名を、誤り記したとは思えない。^⑪では板刻事業の當事者が、自分の職名を誤刻したまま放置したのであろうか。それはおかしい。そこで次のように考えたい。つまり、中宗七年刊本に保存されて傳わる金居斗跋および官銜は、中宗七年の板刻に際して覆刻したもので、その時にロ・ニ

表2 『慶尙道營主題名記』と太祖三年刊記との異同

記號	人名	題名記	刊記
イ	沈孝生	按廉副使	按廉使*
ロ	都觀察黜陟使	都觀察黜陟使	都觀察黜陟事
ハ	ナシ	管學事	勸農 管學士
ニ	同知中樞院事	經歷	同樞院事
ホ	崔得岡	右咨議	權知經歷 左咨議
ヘ			
ト			

* これのみ跋の記載。あとは官銜にみえる。

のような(あるいはトも含めて)誤刻が生じたのである、と。なぜ閔開の箇所には明らかな誤りが集中したかといえば、ここだけが一行に四一字という、非常に細かいものであるため、覆刻の際に誤讀されたことと、校正者がそれを訂正し得なかったことによるものと思う。

ところで、この太祖三年の板刻は慶州(當時は雞林府^㉔)でなされた、という考えがまだに一般的であるように思われるが、實はそうではない。陳義貴や金居斗が「府使」であることから察せられてよいが(雞林府は府尹である)、『慶州先生案』の當該條をみても、府尹として別の人物が記されているのみである。ではどこで板刻されたか、つまり陳義貴・金居斗がどこの府使であつたかという、いまのところわかっていないのである。もちろん、沈孝生・閔開が慶尙道の按廉使・觀察使であることから、慶尙道内のある府であることは疑いない。そこで、太祖二・三年の當時における慶尙道内の府

をあげてみると次の通りである。^④

(1) 安東大都護府（現在、安東）

『世宗實錄地理志』に「恭愍王十年辛丑至正二十一年（一二六二）避紅賊南巡駐輦、以州人盡心供頓、壬寅（一二六二）復陞〔福州牧〕爲大都護府」とある。

(2) 寧海府（寧海）

『世宗實錄地理志』に「忠宣王二年庚戌（一二二〇）汰諸牧、改〔禮州牧〕爲寧海府、本朝太祖六年丁丑（一二九七）六月、始置鎮兵馬使兼府使、太宗癸巳（一二四三）例改爲都護府」とある。

(3) 順興府（順興）

『慶尙道地理志』に「忠穆王代至正丁亥（一二四七）^⑤又安胎、升〔知興州事〕爲順興府、本朝太宗代歲在癸巳（一二四三）改都護府」とある。

(4) 京山府（星州）

『慶尙道地理志』に「至大辛亥（一二二二）降〔星州牧〕爲京山府、其升降事跡未詳、本朝因稱京山府」とある。

(5) 晉陽大都護府（晉州）

『世宗實錄地理志』に「本朝太祖元年壬申（一二九二）以顯妃康氏內鄉、陞爲晉陽大都護府、太宗二年壬午（一二四二）、還爲晉州牧」とある。

(6) 金海府（金海）

『世宗實錄地理志』に「忠宣王二年庚戌（一二二〇）汰諸牧、復爲金海府、本朝因之、太宗十三年癸巳（一二四三）例改爲都護府」とある。

以上六府のうち、まず(1)安東大都護府については、慶州と同様に先生案が傳わっており、^⑤當該の箇所には、

金穰 府使、壬申赴任、同年遡

李專 府使、壬申赴任、癸酉遡

李瑤 府使、癸酉赴任、乙亥遡

と、府使として別の人物が記されているため、除外される。また(4)京山府についても、『李朝太祖大王實錄』卷五、三年

二月乙酉條に、

京山府使李湜、得異草於河濱縣、色赤三枝體如菌、以爲瑞、送于參贊門下府事南閭第、南閭謂靈芝、以獻

とあり、當時の府使が李湜であったとわかるから、除外される。しかしこれ以上は不詳で、結局(2)寧海府・(3)順興府・(5)晉陽大都護府・(6)金海府の四府のうちいずれか、と考えるしかないのである。

それではあらためて刊記によって、太祖三年の板刻の経緯をのべよう。

はじめ板刻を企てたのは慶尙道按廉使の沈孝生で、太祖元年壬申(一三九二)一〇月に着任した彼は、『三國史記』が寫本でのみ流布していることに鑑み、その一本を得たのを機會に、管内某府の府使陳義貴に、同府で刻成するようにもちかけたのであろう。そして二年癸酉(一三九三)七月に同府に正式に下牒し、府では八月から板木を雕らせ始めた。この二人はまもなく轉任したが、一〇月に着任した沈孝生の後任の觀察使^⑤閔開もこの事業を完成させようという意志をもち、同じく一〇月に着任した陳義貴の後任の府使金居斗に命じ、作業を繼續させた。その結果翌三年甲戌(一三九四)四月に完成した、というわけである。

さてここに沈孝生が得たという「一本」であるが、『三國史記』の印本の雜林^⑥にあったものは既に散佚してしまい、寫本を以て行なわれている、というから、やはり寫本であったと考えられる。そこで次に、その寫本をどのように用いて板刻したかを考えてみたい。ただし明らかに太祖三年刊本であると認められるものが傳わっていない以上、中宗七年刊本を用いて考えるしかない。その手掛りはやはり、中宗七年刊本の卷五・卷七にみられる缺字・墨格であり、まずこの缺字・

表3 巻5～巻7の缺字と『三國史節要』等との比較

番 號	缺字の ある 巻一葉	該當年次	缺字のあ る行	缺字數	補充し得る字數			補 註
					三國史 節要	東國通 鑑	顯宗實 錄字本	
(1)	5- 1	善德王即位紀	右8・9, 左 1	30	8	8	0	*「庚信」「級 還」「急」 **「庚信」「急」 論を引用せず
(2)	2	5年	右 9, 左 1	13	7	7	0	
(3)	3	9年	右 9	3	0	0	0	
(4)	4	11年	右 9, 左 1	5	2	2	0	
(5)	5	12年	右 9	1	1	1	0	
(6)	6	14年	右 9, 左1・2	9	5*	3**	2	
(7)	7	論	右 9	4	0*	4	4	
(8)	8	眞徳王2年	右 9, 左 1	8	7	7	0	
(9)	9	2年	右 9, 左 1	9	8	8	0	
(10)	10	4年	右 9, 左 1	7	7	7	0	
(11)	11	5年	右 9	4	1*	1*	0	「遺」を補う
(12)	13	太宗武烈王4年	右 9	3	0	0	0	
(13)	14	7年3月	右 9, 左 1	8	6	6	6	
(14)	15	7年7月	右 9, 左 1	8	6	6	6	
(15)	16	7年7月	右 9, 左 1	7	1	1	1	
(16)	17	7年8月	右 9, 左 1	6	0	0	0	
(17)	18	7年11月	右 9	1	1	1	0	
(18)	6- 1	文武王即位紀	右 9, 左 1	6	5	5	6	
(19)	2	元年	右 9, 左 1	9	1	1	0	
(20)	8	6年	左 1	1	1*	1*	1*	「並」を補う
(21)	10	8年6月	右 9	1	0	0	0	
(22)	12	8年11月	右 9	2	0	0	0	
(23)	13	9年	右 9, 左 1	5	0	0	0	
(24)	14	10年3月	右 9, 左 1	6	1*	1*	0	
(25)	15	10年7月	右 9, 左 1	7	0	0	0	
(26)	16	10年12月	右 9, 左 1	10*	0	0	0	
(27)	7- 1	11年	右8・9	14	0	0	0	
計	27		47	187	68	70	26	

らはどのように考えればよいであろうか。そのうちの二、三を實際にみてみたい。

例えば(5)は、中宗七年刊本に「彼見者以爲我□必皆奔走」とある部分を、『三國史節要』は「彼見者以爲我師來援、必皆奔走」としている。「來援」はともかく、「師」を補えば、中宗七年刊本の場合も意味が通じるのである。ところが『三國史記』のこの部分は實は『冊府元龜』を引用したものであり、そこでは「彼見者以爲我兵、必皆奔走」となっているのである。恐らく『三國史記』も本來は「兵」とあったものであろう。『三國史節要』の編者は『冊府元龜』もみることなく、意を以て「師」を補い、更に意味を明確にするため「來援」を補ったものと考えられる。

また(10)は「王……作五言大乎(平)頌、遣……法敏以獻唐皇帝、其辭曰、□□□洪業、……修文□□□、□天崇雨施……」とある部分で、『三國史節要』は「其辭曰」以下を「大唐開洪業……修文繼百王、統天崇雨施」としている。『三國史記』はこれを『舊唐書』に據ったものと思うが、『三國史節要』の編者もまた『舊唐書』などに據って補ったものともみることができる。

(9)は「春秋奏曰、臣有七子、願使不雉(離)聖明□衛、乃命其子文注與大監□□□□□□□□遇高句麗邏兵、春秋從者……坐於船上……」とある部分で、『三國史節要』は「春秋奏曰、臣有七子、願留一子以備宿衛、乃留文注而還、春秋至海上、遇高句麗邏兵、從者……坐於船上……」としている。ここでは記事の一部改變もみられるが、よく補充し得ている。それは前後の文章をよみ、意を以て補ったとみることができないだろうか。

これら以外もほぼ同様であり、『三國史節要』の編者は恐らくこのような方法、つまり文章の中で判斷するか、別の書物によって對校するかして、補っていったものと思われる。そしていずれの方法もとれないものは、記事自體を採らずに、省略してしまっているのである。なお先にあげた(1)の場合は、分註に「殊異傳」を引いているから、それらをよんで内容を考え、意を以て補ったものとみられる。

以上要するに、『三國史節要』が補い得た六八字は、缺字のない『三國史記』に據ったものではなく、編者の校勘の結

果なのであり、その時用いた『三國史記』には、いま中宗七年刊本にみるような缺字が既に存在した、といえるのである。そしてその缺字は、用いた『三國史記』がたまたま同じように破損していたため、などではない。なぜならば、中宗七年の改刊の際の底本となった「完本」とは明らかに別のものであるのに、破損の箇所が全く同じということは、まず起こり得ないからである。そこで考えられるのは、もし『三國史節要』編者が用いた『三國史記』が、太祖三年刊本であったとすれば、太祖三年の板刻に際して沈孝生が得た「一本」(寫本)が破損していたか、あるいは既に缺字があったか、いずれかとなる。また、『三國史節要』編者が用いた『三國史記』が、太祖三年刊本より以前の刊本あるいはその系統の寫本であったとすれば、それが破損していたか、あるいは既に缺字があったことになるが、太祖三年板刻の際の「一本」もやはり、それと同じ系統の寫本ということになり、缺字は既にあったとみななければならない。従っていずれにしても、缺字が太祖三年より以前の破損によって生じたものであることは間違いない。

そこで更めて太祖三年の板刻について考えてみよう。中宗七年刊本にみられる缺字は、李繼福の得た「完本」の破損によるものではなく、實は太祖三年の板刻の際に、既にあったものである。そして中宗七年刊本では、それが板心前後に集中しているが、それは太祖三年刊本でも同じであったことになる。従って、沈孝生の得た「一本」も、同じように小口から破損していたか、或いはその部分が缺字であったと推察され、逆にいえば太祖三年の板刻はその「一本」の行數・字數(每行)を動かさない、原本に忠實なものであったといえることができるのである。

3 李朝時代における流通と顯宗實錄字本

李朝時代には、前項までみてきたように前後二回、板刻がなされた。はじめの太祖三年(一三九四)に刻成された板本が、次の中宗七年(一五二二)の改刊當時になお、慶州府に藏置されていたことは、李繼福の跋によって知られるが、その時には既に「剋缺」し、「一行可解僅四五字」というくらいで、とても使いものにならなかったようである。そのた

め李繼福が改刊するに至ったのであるが、それまで印出に用いずに放置されていたのであれば、このように「刊缺」することもないと思われるから、この百餘年の間になりに印出されたとみるべきであらう。

しかしそのいっぽうで次のような状況がみられる。成宗二年（一四八二）二月に梁誠之が一二項の上疏をしているが、その一つは、

一、臣竊惟、書籍不可不深藏以備萬世也、如三國史記・東國史略・高麗全史・高麗史節要・高麗史全文・三國史節要・本朝歷代實錄・統簡謚錄・八道地理志・訓民正音・東國正韻・東國文鑑・東文選・三韓龜鑑・東國勝覽・承文謚錄・經國大典……各備四件外、三史庫、不緊雜書、並皆刷出、又緊關書籍、春秋館及三史庫、各藏一件、永傳萬世幸甚というものである。^⑧ このような上疏がなされたということは春秋館や忠州・全州・星州の地方三史庫に『三國史記』（およびその他の書）がなかったことを意味する。

また同年一〇月には韓明澮の、典校署所儲の布帛を用いて諸書を印するを請う、との啓につづき、徐居正が啓して吾東方自箕子受封以來、年紀雖久、而文籍不傳、其間新羅千歲、高句麗七百載、百濟六百年、一無所傳之書、金富軾掇拾撰三國史、我世祖嘗命儒臣編輯而未就、若前後漢書通鑑等書、則雖無所藏、猶可求於中朝、本國之史、假如無傳、何從而得乎、所當先印者、三國史也、

といっている。ここに「所當先印者、三國史也」とするのは、いうまでもなく『三國史記』の重要性を考慮してのことであらうが、それ程流布していないという状況が背景にあったと想定することも許されよう。従って、全體的には、『三國史記』はそれ程流通していなかった、と考えるべきかもしれない。^⑨

また先にもふれたように、この間に、『三國史記』を利用して成文した、次の三つの敕撰史書が成立している。

(1) 權近・河審ら『三國史略』（『東國史略』）太宗三年（一四〇三）八月完成^⑩

(2) 盧思愼・徐居正ら『三國史節要』 成宗七年（一四七六）二月完成^⑪

(3)徐居正・李克墩ら『東國通鑑』 成宗一六年(一四八五)七月完成^③

これらはいずれも、三國別の本紀をもつ紀傳體の『三國史記』に對して編年體であり、^④ 便利なこれらの成立によって、『三國史記』の利用は一層少なくなったと考えられる。^⑤

ところで右の徐居正らの啓に對して成宗は、

可、書籍廣布之策、令戶曹典校署提調議啓

と答えているが、もし實際に、徐居正の要請通り『三國史記』を「印」したのであれば、それは慶州府藏の太祖三年刻成の板木によつて印出したものと考えerしかない。なぜならば李繼福跋に「他所無刊」とあり、それを信じれば、中央で新たに刊行して印出したとは考えられないからである。

さて、中宗七年の改刊後、磨滅した太祖三年刻成の板木は處分されたのであろうが、新しい板木はどうなったであらうか。まず、刻成後三〇年を経た中宗三七年(一五四二)七月に行副司果の魚得江^⑥が上疏しているが、そのなかに

東國史記有三國史・高麗史節要、三國史刊行慶州、其板尙在

とあり、板木のなお存在することを伝える。つづいて明宗九年(一二五四)に成立した魚叔權『攷事撮要』八道程途(別號冊板并附)の慶州の項に「三國史」が著録されている。^⑦ これは許鈞の續撰本(宣祖一九年(一五八五))に至つても同じである。^⑧

ところが壬辰・丁酉の亂を間にはさんだ朴希賢の改修本(光海君六年(一二一三))になると、冊板目錄がなくなつて、かわりに土産が記されており、李爾瞻の跋にはその理由を「至於八道冊板、今則燒毀、故並皆刪去、以土産代之」と記している。^⑨ 『三國史記』の板木も他の多くと同じく「燒毀」してしまつたかともみられるが、顯宗一〇年(一二六九)成立の『東京雜記』卷三、書籍、には「府藏冊板」として「三國史」があげられている。^⑩ これは「出攷事撮要」と斷わつてはいないが、つづけて「刊不用」と、その状態を伝えるため、傳存していたとみてよいかと思われる。ただ記すとおり、もはや使ひものにはならなかつたようである。

その後、次に述べる一八世紀半ばの顯宗實錄字本の出現まで、『三國史記』の流通は寫本によるしかなかったのであり、そうした状況は、師の星湖李瀛に宛てた順庵安鼎福の書簡のなかの次の一節によっても窺える。

三國史無從求見、向適權友巖來訪、聞知其由、爲之借示

これによれば、安鼎福は權巖から借用した『三國史記』を書寫して用いたものと思われるのである。

安鼎福の右の書簡は英祖三三年（一七五七）のものであるが、その後まもなく顯宗實錄字による『三國史記』の印出が行なわれた。顯宗實錄字とは『顯宗大王實錄』を印刷する目的で、それが完成した肅宗三年（一六七七）頃にはじめて鑄造された銅活字をいう。一字の大きさは大字が一・三樞×一・四樞、小字が一・三樞×〇・七樞である。

『三國史記』の顯宗實錄字本（圖版3参照）は、英祖三十六年（一七六〇）の印出という。板式は次の通りである。

三國史記卷第七

輪忠定雅端國寶化同德功臣開府儀同三司檢校太師守太保門下侍中判

書事無史禮部事集賢殿大學士監修國史上柱國致仕臣金富弼奉 宣撰

新羅本紀第七

文武二下

十一年春正月拜伊食禮元爲中侍發兵侵百濟戰於熊津南幢主夫果死之韃靼兵來圍舌口城不克將退出兵擊之斬殺三百餘人聞唐兵欲來掠百濟遣大阿食真功阿食兵守甕浦白魚驛入

一寸夏四月震興輪寺南門六月遣將軍竹旨

圖版3 顯宗實錄字本

四周單邊。半郭、縱二三・二樞、横一六・〇樞。有界。每半葉一〇行、每行一八字。註雙行。內向花紋魚尾。板心、三國史本紀（列傳等）卷幾、葉數。

この顯宗實錄字本は、卷末に金居斗跋を附すのみで、印出に至る具體的な経緯は知ることができない。ただ、金居斗跋を附すのであるから、太祖三年刊本を直接底本としたか、あるいはやはり金居斗跋を附す中宗七年刊本に據ったか、いずれかと考えられる。

そこで次に、先の表3を利用して、この印出に際する校勘をみておきたい。卷五〜卷七に至る缺字一八七のうち、顯宗實錄字本が補充しているのはわずかに二六字で

ある。しかも補充している内容は、(7)において、『東國通鑑』が「易曰、羸豕孚蹢躅」と補ったものを「易云、羸豕孚蹢躅」と改めるほか、(8)に「庾信曰□□□近、請往綴紐、因與俱往宅置酒、從容喚□□□針線來縫」とある部分を、『三國史記要』が「庾信曰、吾家幸近、請往綴之、因與俱往置酒、從容喚寶姬、來綴」としているのに對し、「庾信曰、吾家幸近、請往綴紐、因與俱往宅置酒、從容喚寶姬持針線來縫」と追加しているくらいで、あとは『三國史記要』や『東國通鑑』を出るものはない。ましてそれを利用してさえないものもある。従つてその限りでは、あまり充分な校勘といえるものではない。

4 高麗時代における板刻と流通

では最後に、『三國史記』が成立した高麗時代にまで遡つて、その板刻と流通の状況を概観しておきたい。

先にみたように、李朝中宗七年刊本の卷末に附す太祖三年刊本の金居斗跋には、

三國史印、本之在雞林者、歲久而泯、世以寫本行

とあった。「印本」は刊本と同じであり、これによる限り、その李朝初年より以前に『三國史記』の刊本が存在していたことは間違いない。とすれば、高麗時代において、少なくとも一度は、『三國史記』が板刻されていたことになる。しかし「歲久」とあることからかなり前のことと認識されたことは窺えるが、果たしていつのことであるか、具體的には全く不詳であるといわねばならない。

ただ板刻が一度とすれば、最も可能性の高いのは、それが進上された直後であらう。つまり、進上が高麗仁宗二三年(一一四五)二月壬戌であるから、一二世紀半ばということになる。これは大勢論的にも、當時の高麗の木版印刷の技術水準の高さや、中國でこれより數十年前に完成した『新唐書』や『資治通鑑』などが、進上後すぐに板刻されたという事實、そして『三國史記』がそれらの史書に少なからぬ影響をうけていたことなどから、充分あり得たことと考えられるのである。

さてこの『三國史記』は、かなり早い時期に中國に流出する。それは『玉海』卷一六、地理、異域圖書の項に「淳熙三國史記」と題し、

元年五月二十九日、明州進士沈恣、上海東三國史記五十卷、賜銀幣百、付祕閣とあることよって知られる。淳熙元年は高麗明宗四年（一一七四）で、進上後三〇年を経っていない。

國內における流通について確認できる最も早い例としては、李奎報「東明王篇」序の

…越癸丑四月、得舊三國史、見東明王本紀、其神異之迹、踰世之所說者、然亦初不能信之、意以爲鬼幻、及三復耽味、漸涉其源、非幻也、乃聖也、非鬼也、乃神也、況國史直筆之書、豈妄傳之哉、金公富軾重撰國史、頗略其事、意者公以爲國史矯世之書、不可以大異之事爲示於後世、而略之耶

という記事をあげることができよう。この「癸丑」は明宗二年（一一九三）で、彼の二六歳の年である。その四月に『舊三國史』を得たわけだが、それと金富軾が重撰した國史即ち『三國史記』とを比較して論評しているのであるから、李奎報は當然、『三國史記』を讀んでいたことになる。

つづいて、引用したとの明記はないが、記されている文章から判斷して恐らくそうであると思われるものに、「金大安元年己巳（一二〇九）六月」に卒し、「是年七月」に葬られたという金鳳毛の墓誌銘がある。當該部分を抜きだして、『三國史記』中宗七年刊本と比較してみると、次のようになる。

〔金鳳毛墓誌銘〕 金氏系出新羅王初脫解王夜聞金城西 林中 有雞鳴聲遲明使 視之有金色小櫃掛於樹枝白雞鳴於
〔三國史記〕 王夜聞金城西始林樹間有雞鳴聲遲明遣瓠公視之有金色小櫃掛 樹枝白雞鳴於

其下 王乃使人取 之有一小 兒在其中姿狀奇偉王喜 曰 豈非天遺我 令胤乎乃收養之

其下瓠公還告王 使人取櫃開之有 小男兒在其中姿容奇偉上喜謂左右曰此豈非天遺我以令胤乎乃收養之及長聰明多智

以其出於金檀因以爲姓

略乃名閼智以其出於金檀姓金氏 改始林名雞林因以爲國號

みられる通り、一部節略はあるものの、ほぼ同じである。金氏がその始祖を語るにおいて『三國史記』を用いたとみている。

次に、高宗二年（一二二五）頃成立の覺訓『海東高僧傳』があげられる。例えば卷二、流通一之二、釋安含條の

又按新羅本記、眞興王三十七年、安弘入陳求法、與胡僧毗摩羅等二人廻、上楞伽勝鬘經及佛舍利

は「新羅本記（紀）」と明記されている點で明確である。^⑩ また他にも文章から判斷して、引用したとみられる箇所がいくつある。^⑪ そして次には、周知のように一然『三國遺事』があげられる。^⑫ この書の成立は一二八〇年代（高麗忠烈王代）とされている。^⑬

以上、實際に『三國史記』を利用しているものをいくつか羅列することによって、一應の流通状況をみた。しかし全體的にどうであったかは知り得ない。ここで再び金居斗跋の一節にたちもどってみると、『三國史記』刊本の雞林にあるものが歳久しくして散佚し、今は寫本で行なわれている、というのであるが、雞林即ち新羅の舊地においてさえ、^⑭ このような状況がみられたのであるから、流通の實情は推して知るべしであるというべきかも知れない。

おわりに

以上、時間の前後にとらわれずに述べてきたが、蕪雜な小考を閉じるにあたって、時間の経過に従った簡単なまとめをしておきたい。

『三國史記』は、高麗仁宗二十三年（一二四五）二月壬戌に進上されてより以後、少なくとも三回、板刻がおこなわれ

た。

まず最初は高麗時代であるが、年代は不明である。ただ大勢として、進上直後に板刻された可能性が強い。

李朝時代になってからの最初は、太祖三年（二三九四）に新羅の舊地慶尙道の某府において、按廉使沈孝生・府使陳義貴および後任の觀察使閔開・府使金居斗と、二代にわたる事業として板刻された。板本は既に傳わらず、沈孝生の得た寫本を底本としたのであるが、行數・字數はそのままにした。そのため、その寫本の小口附近にあった缺字（もしくは破損）が、板心の前後にそのまま残ることになった。また高麗王の諱の避諱缺筆も多くは傳えたものとみられる。

その後百餘年を経た中宗七年（一五二二）に、慶州府尹李繼福が、府藏の太祖三年刻成の板本が磨滅したため、『三國遺事』とともに改刊を企て、わずか六箇月のうちに刻成した。これがいわゆる「正徳本」であり、今日までは完全に傳わる板本として最古のものである。通行のテキストは玉山李氏舊藏のこの板本を影印したものである。

さて、この改刊においても、その底本である太祖三年刊本の行數・字數は動かさず、形式的には忠實な再現をめざした。従って、中宗七年刊本の卷五く卷七にみられる缺字・墨格は、少なくとも高麗時代の寫本にまで遡るものであり、また板式についても、高麗時のおもかげを傳えるものといえる。それは王諱の缺筆についてもいえることである。ただし、刻字などに稚拙さが目につき、時としておかしい文字となっているが、故意の改字ではないため、充分に注意をすれば、原形を窺うに足るものである。

この板本は一應、壬辰・丁酉の亂以後まで傳わったようであるが、一七世紀には既に、使いものにならなくなっていた。そこで、一八世紀の中頃に至って、『顯宗大王實錄』印出のために鑄出したのと同じ活字によってはじめて活字（顯宗實錄字）本が印出されたのである。これは太祖三年刊本に直接據ったか中宗七年刊本を底本としたかは不明であるが、系統を同じくすることは間違いない。しかしこれらが毎半葉九行・毎行一八字であるのに對し、一〇行・一八字と改めている。またその校勘は、充分といえるものではない。

そこで、通行テキストである中宗七年刊本の、テキストとしての位置であるが、年代的にはかなり後代のものというべきであろう。しかし内容的には高麗時代のものとは大きな變動がないとみてよく、のちの顯宗實錄字本や『三國史節要』等によって補正し得る部分はあるものの、現時点において手にし得るテキストとしては、やはり最良のものといつてよいであらう。

註

① 「學東叢書」第一『三國史記』、學習院東洋文化研究所、一九六四年四月。A5版で、一頁に『三國史記』の二葉を収め、卷末に末松保和氏の「三國史記解説」と目次を附す。

② 「韓國古典叢書」2『三國史記』、民族文化推進會、ソウル、一九七三年二月。B5版で、一頁に二葉を収め、校勘を加え（金貞培氏による）、卷頭に校勘の凡例と目録を附す。

③ 玉山（慶尙北道月城郡安康邑玉山里）李氏は晦齋李彥迪（一四九一～一五五三）の後孫家で、その舊藏本。いまは李彥迪を祀る玉山書院（宣祖五年（一五七二）創設、同七年賜額）に藏し、寶物第五二五號に指定されている。従つて玉山書院本と稱することもあつた。しかし玉山書院には同じ板の『三國史記』をもう一本（零本、八冊）藏しており、これと區別するため、玉山李氏本と稱しておく。

④ 『三國史記』、古典刊行會、京城、一九三二年二月。線装、九冊。

⑤ 「學東叢書」本が古典刊行會本の再影印であることは、末松保和氏の解説中に明言があるが、「韓國古典叢書」本は凡例に「本書は中宗壬申刊本（世稱「正徳本」）を縮小影印し」とある

のみで、原本についての具體的な言及はない。しかも校勘に用いた「同書異本」の一つとして「古典刊行會本（玉山書院本）」をあげており、あるいは玉山李氏本とは別の中宗壬申刊本を縮小影印したかともうけとれよう。しかし、古典刊行會本が、玉山李氏本に破損のある卷二六の第二葉（第一〇葉を朱色で補印しているもの）を、この「韓國古典叢書」本がそのまま踏襲しているため（ただし色は變えていない）、これも古典刊行會本の再影印とみて間違ひなからう。

⑥ 「正徳本」とよぶのは、後述するように、跋に「正徳壬申」と記しているからである。「正徳本」即ち中宗七年刊本は、今西龍氏によれば「現在余の知る限りに於ては、慶州玉山の李氏に完本を藏し、其他朝鮮總督府、京都帝國大學、玉山書院、及び前田公爵家に零本を藏するにすぎず、傳存甚だ少し」（記、朝鮮史學會編『三國史記』、近澤書店、京城、一九二八年一月。國書刊行會、一九七一年七月覆刻〔三版〕）。景仁文化社、ソウル、一九七二年一月覆刻〔初版〕という。その後發見されたものもあるが、現在においても「完本」は玉山李氏本以外にないといつてよからう。

谷之原不克死者二千餘人
 十年秋七月甲辰星隕如雨
 十二年春三月遣使入梁朝貢夏四月丁卯殲
 感化南斗
 十六年春移都於四城^{（一）}國號南扶餘
 十八年秋九月王命將軍燕會攻高麗牛山
 城不克
 十九年王遣使入梁朝貢兼表請毛詩博士^{（二）}
 梁等經義并二丘畫師等^{（三）}人之

圖版4 中宗七年刊本（河合文庫本）

なお右に京都帝國大學に藏するとある零本は、河合弘民氏舊藏本で、現在京都大學附屬圖書館が所藏する（請求記號 河合文庫／サ／16）。四冊（卷二〇）～卷二六、卷三二～卷三七、卷三八～卷四四、卷四五～卷五〇）を傳えるのみだが、玉山李氏本に破損のある卷二六を完存し（圖版4參照）、兩者をあわせれば中宗七年刊本の原形を窺ひ得る。

また前田公爵家に藏するという零本は、現在東京駒場の前田育徳會、尊經閣文庫に所藏。それを底本として文科大學史誌叢書『三國史記』（吉川弘文館、一九一三年二月）を校訂した

坪井九馬三氏の例言によれば「所闕者・卷一・卷二・卷廿三至卷廿九・卷三十四至卷三十六・卷四十九卷五十・凡十四卷」という。

⑦ これは、やはり卷末を存す河合文庫本（前註參照）でも同じであり、決して玉山李氏本の缺落ではない。

⑧ 『三國遺事』の「正徳本」即ち中宗七年刊本には、天理圖書館所藏本（今西龍氏舊藏、安鼎福手澤本）と、ソウル大學校中央圖書館所藏本とがあり（田中俊明「朝鮮古代史研究の基本史料」『歴史公論』四卷九號「雄山閣、一九七八年九月」特集關係文獻解說、參照）、前者の影印としては(1)「京都帝國大學文學部叢書」第六、京都帝國大學文學部、一九二一年三月(2)古典刊行會、京城、一九三二年九月(3)「學東叢書」第二、學習院東洋文化研究所、一九六四年一月(2)を縮小再影印)の三種があり、後者の影印として(4)「韓國古典叢書」1、民族文化推進會、ソウル、一九七三年五月、がある。

⑨ 「文科大學史誌叢書」本は、玉山李氏本と同板の「加賀本」（尊經閣文庫本）を底本としたのであるが、卷末即ち金居斗跋を缺いていることもあって（註⑥參照）、「加賀本」古色蒼然、恐李繼福刊本矣」（坪井九馬三「校訂三國史記跋」と認定し、卷末に李繼福跋・官銜を補っている。それに對し前関恭作氏は「坪井氏は此書を三國遺事と同時に李繼福の刻したるものと斷定したれども繼福には兩書刊刻の志ありて遺事は之を刻成したることその遺事跋に明なれども此本はその手に成りたるに非るべし」「又跋語等もなきものなればこれは後に任に慶州にありたる何人か其の意思をつぎて刻出したりと見るべきが

如し」(前開恭作『古鮮冊譜』第二冊、東洋文庫叢刊第十一、一九五六年三月、六七三頁)と、跋のないことを一つの理由として(註36参照)坪井氏の認定に異を唱え、さらに李繼福の刊刻そのものがなかったとみている。しかしこの板心の表記からすれば、李繼福跋はむしろ『三國史記』の跋といってもよく、跋がないというのはあたらなない。ただ、跋が『三國遺事』に附されて存在し、それによって中宗七年の板刻の經緯を知り得るとしても、玉山李氏本(およびそれと同じ板)が中宗七年刊本であるとの説明にはならない。とりあえずは、金居斗の太祖三年の刊記に誤刻があるため太祖三年刊本ではないと考えられること、およびこの跋により確かに中宗七年に板刻がなされたこと、おまけに、また玉山李氏本の傳來が一六世紀以前に遡り得ること、それにこの二回の間に板刻がなされなかったと考えられること(註37参照)が傍證としてあげられよう。

なお前開氏の『三國史記』の項(同書六七一―四頁)には誤解が多く、注意を要する。

⑩ 當然のことながら、『三國遺事』の中宗七年の板刻について知ることにもなる。

⑪ 官銜は左から逆によむのであるが、このように逆に記すのは、例えば『拙菴千百』(一二三四年、晉州開板)や『東京雜記』(一六六九年、慶州都護府使閔周冕刊)など数多い。

⑫ 『慶州先生案』(許興植編『韓國中世社會史資料集』(亞細亞文化社、ソウル、一九七六年五月)所收影印本に據る)二二九頁。

⑬ 『慶尙道營主題名記』(内題。外題は『道先生案』。許興植編

『韓國中世社會史資料集』(前註)所收影印本に據る)三五七頁。

⑭ 官階は『經國大典』(一四八五年成立)卷一、吏典、京官職、による。

⑮ 都事は『經國大典』卷一、吏典、外官職、慶尙道の項によれば従五品相當であり、「階卑職高則稱守」(同、京官職)であるから、承議郎の時は「守都事」であつても、奉直郎になれば「都事」となるのが普通である。しかし官銜による限り奉直郎も「守都事」のようである(俟後考)。いずれにせよ、承議郎の時は「守都事」であるといえるから、「都事」と記す「題名記」は、省略したものといえよう。朴詮の後後では例えば「行都事」であるはずの朝奉大夫(従四品)魚得江も「都事」であるし(三五六頁)、朴詮より低階の宣教郎(従六品)林鵬も「都事」である(三六一頁)。ただし「守都事承訓郎梁舜卿」(三三二頁)や「行都事朝奉大夫金克一」(三三六頁)というように正確に記す場合もあり、省略するのを通例としたわけではなさそうである。

⑯ 慶州府の事業であるから、府内の諸邑とみてよからう。例えば『慶尙道地理志』(朝鮮總督府中樞院調査課編『葛城末治校訂』『校訂慶尙道地理志・慶尙道續撰地理志』、朝鮮總督府中樞院、京城、一九三八年三月〔弗威文化社、ソウル、一九七六年九月覆刻〕に據る)には慶州府の屬縣として安康・杞溪・神光・慈仁の四縣をあげ、以下部曲四、驛八を記すが(二四四頁)、「列邑」が府の主邑以外にどの範圍までを指すかは、もとより明らかでない。

①⑦ 太祖三年の金居斗の刊記を保存しているということは、それ以前の板ではないことを示し、また李繼福跋に「他無所刊」とあるのを信じれば、それ以後中宗七年に至るまでに板刻はなされなかったとみられる。

①⑧ 今西龍氏は「正徳刊本三國遺事に就て」（今西龍著・今西春秋編『高麗及李朝史研究』、國書刊行會、一九七四年一月〔初出、『典籍之研究』五號・六號、一九二六年一〇月・一九二七年八月〕）で「正徳新刊の底本となりし權輿の提出せし本文は、李朝刊本即ち舊式板の完備せしものか、或は更に一代を溯りて高麗刊本の完備せしものなるか」を問題とし、「所謂舊式板の完備せしものなりとするには、多少の疑なきにあらざとすに止めて、更に後日の考究を俟つの外なきなり」とする（一一四～一五頁）。『三國遺事』についてはなお考究の必要もあるうが、『三國史記』の場合は本文の通りでよからう。

①⑨ この間全三七葉のうち缺字も墨格もみられないのは、卷五の第二葉・第一九葉・第二〇葉（末葉）、卷六の第三葉・第七葉・第九葉・第一一葉のみであり、残る二七葉にみられる（表3参照）。

②⑩ 河合文庫本には破損がない。註⑥参照。

②⑪ 例えば、行數の異なる顯宗實錄字本（第3項参照）は、板心から離れている（註⑨参照）。

②⑫ 一行を一八字とみて（まれに一七字・一九字もある）缺字數を算えた。以下同じ。

②⑬ 『資治通鑑』卷一九五、唐紀一一、太宗中之上、貞觀一四年二月丁丑條。

②⑭ 例えば「文科大學史誌叢書」本（註⑥所掲）は「高昌^{②⑮}書」と補い、頭註に「昌吐二字、據資治通鑑補之」と記す。朝鮮史學會本（註⑥所掲）は「高昌^{②⑮}吐蕃」とする（△は原文通り）。『三國史記』卷四一、列傳第一、金庚信上には「王又拜庚信爲上州將軍、令拒之、庚信聞命即駕、不見妻子、逆擊百濟軍走之、斬首二千級」とあり、これから充分推定できよう。

②⑯ 顯宗實錄字本には「庚信」とある。

②⑰ 「栳（集韻、大杙也）李」では明らかにおかしく、顯宗實錄字本は正しく「桃」としている（遼娑尼師今二三年條）。なお以下の舉例の檢出は、『韓國古典叢書』本（註②所掲）の校勘を参考にした。

②⑱ 諸活字本は正しく「子」としている（奈解尼師今即位紀）。

②⑲ 同じ行の下にも「角千、金仁問」とある。大角千・角千は新羅の官位である。顯宗實錄字本は正しく「干」としている（文武王八年六月二日條）。

②⑳ 顯宗實錄字本は正しく「改」としている（聖德王即位紀）。

③① この頃の生員に對する評價として『燕山君日記』卷四九、九年（一一五〇三）三月庚辰條に「軍器寺主簿李九純曰……然名雖生員進士、而不解句讀者、尙多有之」とある。

③② (1) 「欽」「眞欽」という人名の一部。眞欽は例えば卷六、第二葉右五行にみえる。顯宗實錄字本は「欽」とする（太宗武烈王八年四月一九日條）。

(2) 「建」「即募律兒」という箇所で、本來は「健兒」であらう。ただし「健」とすると違いが大きいので「建」とよみ、「健」の省畫と考えておく。「文科大學史誌叢書」本（註

⑥所掲)は「律」とよみ、頭註で「律、健之省畫」としている(文武王一一年七月二六日條、「大王報書云」の「至〔頭慶〕六年」の部分)。

(3) 「運」 「金欽運」という人名の一部。金欽運は例えは卷八、第六葉左三行にみえる。諸活字本は「運」とする(神文王三年二月條)。

③ 高麗王の諱は『高麗史』世家・『高麗史節要』に據る。

③④ 避諱字形(改字も含め)の例示は「文科大學史誌叢書」本(註⑥所掲)の「例言」にみえる。

③⑤ ただし書寫人あるいは刻手によつては、正しく讀みとつて(更には缺筆を正字に復して)いる例もあるようである(註③の眞欽・金欽運とする例など)。

③⑥ 前聞恭作氏は「繼福は慶壽集等の編刊あり 相當文筆趣味の人なれば 此本をその刊刻としては受取れず」(前聞恭作『古鮮冊譜』第二冊(註⑨所掲)六七三頁)と、恐らくこのような稚拙さをもう一つの理由として(註⑨参照)、李繼福刊であることを認めていない。しかし跋の存在などからやはり李繼福刊とみるべきであり、ここではこのような稚拙さを許した理由として、彼がその在任期間中に刻成させようと急いだからではないかと想定してみたい(彼の轉任は、本文所掲の『慶州先生案』にみられるように、完成後三箇月の「癸酉三月二十五日」であった)。

③⑦ 『慶尙道營主題名記』(註⑬所掲)三三九頁。

③⑧ 『李朝太祖大王實錄』卷二、元年二月壬子條に「慶尙道按廉、沈孝生」が、同卷三、二年三月辛酉條に「慶尙道按廉、使沈孝生」

がそれぞれみえている。

③⑨ 藤田亮策「讀史閑話」(一)(同氏『朝鮮學論考』、藤田先生記念事業會、一九六三年三月〔初出、『書物同好會會報』三號、同會、京城、一九三九年三月。筆名、駝駱山房學人)に、「營主先生案には「權知」たることを省略して居る」とある(四六六頁)。ただ、『營主題名記』において、崔得聞より一〇行後に、「權知經歷」と記す例があり、省略が通例であつたわけではなさそうである。

④① 藤田亮策氏は「右咨議が正しいと見るべきである」(前註論文、四六六頁)とする。

④② 觀察使のこうした職任については、張炳仁「朝鮮初期의 觀察使」(『韓國史論』4、서울大學校人文大學國史學科、ソウル、一九七八年三月)を参照。

④③ 藤田亮策氏によれば、「玉山書院本」は正しく記しているとのことであるが(註③⑨論文、四六六頁)、それならば玉山李氏本とは別の板ということになる(要確認)。

④④ 藤田亮策氏は「通行本三國史記には閉開は「嘉靖大夫慶尙道都觀察點防事兼經金玉集轉輸勸農管學士提調刑獄第八中書樞院事」と何のことが譯の分らぬ官秩を陳列して居るが正徳刊本の印刷の悪いものを勝手に解釋したもので、正徳刊本が既に細字の古板本を誤寫したものがあり、遂にかかる結果に立至つたのである」とし、更に「若し史記本文の中に、是ほどの誤字誤讀がありと考えたら、私達の此書に對する考を變更する必要がある」という(註③⑨論文、四六五～六頁。圍點藤田氏)。右の「通行本」とは顯宗實錄字本(次項参照)を指すと思われる

が、「是ほどの誤字誤讀があるのは、ここが特別に細かいためであり、同じような誤字誤讀が全體に及ぶとみる必要はなからう。なお中宗七年刊本では、各卷頭第二行にあるべき金富軾の官職を削ってしまったと思われる卷が多いが(田中俊明『三國史記』撰進と『舊三國史』、『朝鮮學報』八三輯、一九七七年四月)五〇頁註(1)参照)、これも一行に五六字という細かさによるのではなからうか。

④④ 『慶尙道地理志』(註①⑥所掲)に、「大尉王時至大戊申(一三〇八)改〔東京留守官〕稱雞林府、升降事跡未詳、本朝太宗時乙未(一四一五)復稱慶州府」とある(二三頁)。

④⑤ 例えば金斗鍾『韓國古印刷技術史』(探求堂、ソウル、一九七四年一〇月)一三二頁に「太祖三年(洪武二七年、1394)4月に雞林府で重刊した三國史記」とあり(一)内、金氏)、また近刊の李丙熙譯註『三國史記』(乙酉文化社、ソウル、一九七七年七月)國譯篇でも金居斗跋の「府」に「(慶州府)」と註記している(七三七頁)などがあげられる。

④⑥ 藤田亮策氏によって、一九三九年に既に指摘されていたことであり、「最近末松君(保和氏)の注意によって」詮索した結果であるという(註③⑨論文、四六四頁)。また近年でも沈暁俊「三國史記」에 관한 研究——史料의 價値의 稀薄性에 대한 異見——(『국학보』一〇卷九號、大韓民國國會圖書館、ソウル、一九七三年一月)の指摘がある(九頁)。なお同論文の入手には、河政植氏のご協力を得た。記して謝意を表したい。

④⑦ 『經國大典』卷一、吏典、外官職、慶尙道の項、從二品に

「府尹一員慶州」とあり、慶尙道では慶州府(一四一五年まで雞林府。註④④参照)のみが府尹であった(『慶州先生案』によれば、牧使「一六五〇年一六五九年」・府使「一六六五年一六七九年」を稱した時期もあったが、それを除けば一三〇八年に雞林府と改稱して以後、一八九四年に至るまで府尹を稱した)。なお、同書によれば、大都護府使・牧使は正三品、都護府使は從三品である。

④⑧ 『慶州先生案』(註②②所掲)の當該條には府尹として俞光啓(壬申二月一日〜癸酉正月二六日)

安敬良(癸酉五月二五日〜同年九月)

崔雲海(癸酉一〇月一日〜乙亥二月一〇日)

が記されている(一九八〇九頁)。

④⑨ 主に『慶尙道地理志』(註①⑥所掲)に據るが、不明瞭な場合には『李朝世宗大王實錄』卷一四八〜一五五、地理志(以下、『世宗實錄地理志』。慶尙道は卷一五〇)に據る。順序はその掲載順。掲載箇所は次の通り。

府名	『慶尙道地理志』	『世宗實錄地理志』*
(1) 安東	七五頁	一一九頁
(2) 寧海	八七頁	一一二頁
(3) 順興	九一頁	一二二頁
(4) 京山	一四一頁	一三八頁
(5) 晉陽	一七七頁	一五〇頁
(6) 金海	一八五頁	一五三頁
		一一六頁
		一一九頁
		一二〇頁
		一三五頁
		一四六頁
		一四九頁

*上段、朝鮮總督府中樞院調査課編『葛城末治校訂』『校訂世宗實錄地理志』、朝鮮總督府中樞院、京城、一九三七年三月。下段、『學東叢書』第十『世宗實錄地理志(李朝實錄別冊)』、學習院東洋文化研究所、一九五七年三月。

- ⑤① 『慶尚道地理志』には「本朝太宗代歲在甲午」(一四一四)とある。

- ⑤② 『世宗實錄地理志』には「忠穆王戊子」(一三四八)とある。

- ⑤③ 『世宗實錄地理志』には「忠宣王二年庚戌」(一三二〇)「汝新牧、降爲京山府」とある。なお註⑤①⑤②の係年について、それぞれいづれが正しいか、ご教示を俟たい。

- ⑤④ 藤田亮策氏はこのうち(3)順興府をあげず、かわりに密陽府・尙州府をあげている(註⑤④論文、四六六頁)。しかし密陽府は、『慶尚道地理志』に「本朝太祖代洪武壬申(一三九二)還爲密城郡、甲戌(一三九四)以朝廷使臣宣官金仁甫之郷、復爲密陽府」とあり(三三頁)、『李朝太祖大王實錄』卷五、三年二月乙酉條にも「陞密陽郡爲府」とあるから、太祖元年から三年二月までは密城郡であつたし、尙州も「靈(顯か)宗時、稱尙州牧、本朝因之」とあるように(一二九頁)、ずっと牧であつたから、いづれも條件にあわない。なお沈隅俊氏は(1)安東大都護府をあげるのみであるが(註⑤⑥論文、九頁)、もとより不十分である。

- ⑤⑤ 『安東府輿地誌』(寫本。今西龍氏舊藏、天理圖書館現藏。

- 註⑤⑤・⑤⑥に記す邑誌全て同じ)先生案の項。「至大戊申(一三〇八)赴任」の牧使趙簡以下を連續して著録。

- ⑤⑥ 『星州牧誌』官蹟、先生案には「李念言(高麗太祖朝)」以下を著

録するが、全てではなく、この李況ももれている。

- ⑤⑦ 『安東鎮管寧海都護府誌』官蹟は金守雄(高麗仁宗代の人)以下を、『晉州鎮晉州牧邑誌』官蹟、邑先生は「新羅向榮」以下(「本朝」は崔迺以下)をそれぞれ著録しているが、網羅的ではなく在任年代も確定できないため、陳義貴・金居斗の名がみえなくても、決め手にはならない。また「順興府誌」官蹟は「本朝」に李甫欽以下を著録するが、李甫欽は「景泰丙子(一四五六)守本府」とあり、次の「肅廟癸亥」(一六八三)到任の韓聖輔以下を連續して載せるのみであり、『金海鎮金海都護府邑誌』先生案には「壬辰兵火燒失無傳、庚午(一六三〇)府使順陽君安夢尹修正」との説明があるように、李朝初については知り得ない。

- ⑤⑧ この四府のうち、板刻の傳統という面からいえば、(5)晉陽大都護府が筆頭であろう。同府開板の例としては、「元貞間」(一二九五〜一二九七)の「帝王韻記」、「至正十四年」(一三五四)の「拙叢千百」、「洪武」四年(一三七一)の「中庸朱子或問」などがあげられる(金斗鍾「韓國古印刷技術史」(註⑤⑧所掲)九七〜八頁、千惠鳳「麗朝官板考」『人文科學』七輯、成均館大學校人文科學研究所、ソウル、一九七八年七月)参照)。
- ⑤⑨ この間に「罷按廉、復觀察點陟使」とある(「李朝太祖大王實錄」卷四、二年九月乙卯條)。

- ⑤⑩ 當時の慶州は雞林府と稱したが(註⑤⑩参照)、金居斗が雞林府尹でないことは既に述べた通りであり、ここではあまり拘わる必要はあるまい。雞林は本來は慶州の、まさしく林の名であったが、新羅全體を指す「大雞林州都督」の稱號や、高麗を指

す『雞林類事』・『雞林志』などの書名もあり、あるいは朝鮮全土を意識していたのかも知れない。しかし一應は新羅の雅稱と考え、慶尚道くらいを指すものとみておきたい。

⑥0 趙炳舜氏私藏書を収めた誠庵（誠庵は趙氏の號）古書博物館には、その藏書目録である國學資料保存會編『誠庵文庫典籍目録』（同會、ソウル、一九七五年五月。同會編『韓國典籍綜合目録』の第四冊にあたる）六一頁に、

木版、「高麗末期」刊、7卷1冊（卷44～50）、四周單邊、半郭20・3×17・3cm、有界、半葉9行18字、註雙行、開有上黑魚尾、25・6×20cm、線裝

紙質…楮紙

備考…武字建字を避諱する

と記されるもののほか、あわせて三種の『三國史記』が所藏されている。實際には四例みえるが、その二番目、「高麗刊、7卷1冊（卷44～50）……」とあるものは、右に記したもの（三番目）と同じものであるとすることで、現物は1冊しかない。同館の整理番號は三七二である。他の二種は、一が顯宗實錄字本で45卷8冊（卷27～31缺）、一が「木版（朝鮮朝前期刊）」というものの（恐らく中宗七年刊本）で8卷1冊（卷22～29）である（整理番號は前者が三五九、後者が二七二）。さて右にあげたものであるが、筆者は一九七八年八月にたまたま寓目する機會を得、確かに中宗七年刊本とは異なる、しかもより良い板本であることを確認した。「高麗末期」とするには問題が残るが、あるいは太祖三年刊本を指すのかも知れない。できれば寫真版の公刊を望むものである。なお田中俊明「ハングルの國に漢字

を求めて」（井上秀雄編『日本古代文化の故郷』、大和出版、一九七九年一〇月）参照。

⑥1 『李朝成宗大王實錄』卷七四、七年二月丙戌條および盧思愼「三國史節要箋」、徐居正「三國史節要序」。撰修の經緯は鄭求福「三國史節要」에 대한 史學史的考察（『歷史教育』一八輯、ソウル、一九七五年二月）を参照。

⑥2 ここでは、亞細亞文化社（ソウル、一九七三年二月）影印本に據る。なお、『三國史節要』より先に（太宗三年（一四〇三）成立）權近らによる『三國史略』（『東國史略』）があるが、残念ながら卷三・卷四（新羅王代で奈勿王元年～眞平王末年）しか傳存（高麗大學校圖書館所藏）しない（鄭求福「東國史略」에 대한 史學史的考察）。『歷史學報』六八輯、ソウル、一九七五年二月）ため、比較に用い得ない。

⑥3 『東國通鑑』（成宗一六年（一四八五）成立。ここでは「韓國學基本叢書」第一四輯（景仁文化社、ソウル、一九七四年四月）として覆刻された光文會刊活字本に據る）は、撰修の經緯からみても（鄭求福、註⑥論文、参照）『三國史節要』に多くを據っており、ことさらにあげる必要もないが参考として附しておく。

⑥4 『冊府元龜』卷九九一、外臣部三六、備禦四、貞觀一七年九月條。「文科大學史誌叢書」本（註⑥所掲）の頭註にも「九月記事、與冊府元龜全同」とある。

⑥5 『舊唐書』卷一九九上、列傳第一四九、東夷、新羅。「百濟之衆」（『新唐書』卷二二〇、列傳第一四五、東夷、新羅、は「百濟」・「作五言太平頌」（爲頌）・「帝嘉之」（帝美其意）

などの語句が一致するから『舊唐書』に據ったとみられる。

⑥ 兩唐書のほか、『文苑英華』卷一六七、詩一七、帝徳や『三國遺事』卷一、紀異第二、眞徳王、などにもみえるが、補充部分が一致するのは『舊唐書』と『文苑英華』のみである。

⑦ 本文に記す以外で、關係記事のあるものを順にあげておく。

(2)『三國遺事』卷一、紀異第二、善徳王知幾三事 (4)(6)『三國史記』卷四一、列傳第一、金庚信上 (13)『資治通鑑』卷二〇〇、唐紀一六、高宗上之下、顯慶五年三月條、『三國遺事』卷一、紀異第二、太宗春秋公 (14)『三國史記』卷四七、列傳第七、官昌 (17)同、匹夫 (18)『三國遺事』卷一、紀異第二、太宗春秋公など。

⑧ 前開恭作氏は「現存本は第五卷より第七卷の初までに缺文若干あり……この缺文は鮮初に撰成の東國通鑑輿地勝覽に此文引用の記事に考ふるに當時の本にも之れあり 麗末に權近の撰せる三國史略にも同様なりと見え 鮮初には缺文の原形は知るに由なかりしこと判然たり なほ此三國史記を引用したる最舊の三國遺事に就て之を檢するに 之は明白に指摘し難きも 善徳王紀初めの自唐來牧丹花圖の記事は この缺文の本によりて辭句をつぎ合はせたるやに思はる さすれば完全なる初本は麗朝江華遷都頃に已に失はれたりと認めて差支なきが如く 一然の見たるも現在本と大差なき不完の本なりしと思はる」とする(前開恭作『古鮮冊譜』第二冊(註⑨所掲)六七二頁)。前半はともかく、三國遺事云々は必ずしもそう考える必要がなく、別の面からの考究が要求される。

⑨ 慶尙道の某府で刻成されたものが慶州府に移置されたわけだ

が、それは新羅王都の舊地である慶州府こそ藏置するにふさわしいと認識されたためでもあろうか。なお『李朝成宗大王實錄』卷九、二年(一四七二)正月丁亥條には「傳于禮曹曰、諸道刊行書冊板子、守令不用意典守、以致散失、自今并錄會計、新舊官傳掌」とあるから、移置はそれ以前かと思われる。

⑩ 印刷部數について、一般的な話であるが、前開恭作氏によれば「活字板から申しますと……官撰書の大部分になつたものは多く二十部から四五十部の間のもので……二百部以上の印刷をしたものは、活字の最も盛んであつた正宗朝に於てすら稀有の例であつた……刻板のものにつきましても、其印刷部數の少いのは活字板に變りはないと存じます」という(前開恭作述『朝鮮の板本』、松浦書店、一九三七年六月。京都大學文學部國語學國文學研究室編『前開恭作著作集』(「京都大學國文學會、一九七四年六月」所收。三三―三頁)。

⑪ 『李朝成宗大王實錄』卷二三八、一三年二月壬子條および『訥齋集』續編卷一、請修撰御製詩文及撰輯東國勝覽等十二事。

⑫ 例えば末松保和「李朝實錄考略」(末松保和「靑丘史草第二」、私家版、一九六六年七月〔初出、『學智院大學文學部研究年報』五輯、一九五九年三月〕参照。

⑬ 『李朝成宗大王實錄』卷一四七、一三年一〇月甲戌條。なお『國朝實鑑』卷一六、同月條には「此可印頒也」とある。

⑭ 『三國史記』は三國の歴史を記すとはいっても中心は新羅であり、新羅王都の舊地である慶州地方と中央とは、この書に對する愛着も異なっていたと思われる。そういう地域差も考慮すべきであらう。

⑦⑤ 別の利用例を一つあげておく。李唐『三國圖後序』（『東文選』卷九二、序、所收）に「歲丙子（太祖四年（一三九六））、寓居新都、讀三國史、苦其繁多……とある。

⑦⑥ 『李朝太宗大王實錄』卷六、三年八月己亥條。撰修の經緯は鄭求福、註⑥②論文、參照。

⑦⑦ 註⑥①參照。

⑦⑧ 『李朝成宗大王實錄』卷一八一、一六年七月甲戌條および徐居正『進東國通鑑箋』、李克敬『東國通鑑序』。

⑦⑨ 『三國史記』に對する批判として「前朝文臣金富軾輯而修之、爲三國史、乃倣遷史國別爲書……以一歲而分紀、以一事而再書……簡秩繁多、辭語重復、觀者病其記此遺彼而難於參究也」（權近『三國史略序』、『陽村集』卷一九、序類および『東文選』卷九一、序、所收）とか「至聘問侵伐災異等事、以一事而疊書」（徐居正『三國史節要序』）とあり、その點を改めるために編年體にしたかのである。

⑧① 中國においても例えば、『南史』『北史』ができてからは南北朝各代の正史は讀まれず、『資治通鑑』ができてからはそれ以前の正史は不必要といわれた程であつたといふ（内藤湖南『支那史學史』、『内藤湖南全集』第一一卷、筑摩書房、一九六九年一月〔初出、弘文堂刊、一九四九年五月〕）。

⑧② 前聞恭作氏は「成化年官印本」として、「此書は今存本を見ず洪武甲戌の刻本に基く本を印出したると思はる」といふ（前聞恭作『古鮮冊譜』第二冊（註⑨所掲）六七三頁）。ややあいまいであるが、「洪武甲戌の刻本に基く（別の）本を〔刊して〕印出した」といふことであらうか。

⑧③ 魚得江は中宗五年（二五一〇）一月から翌年二月まで慶尚道の都事であつたという經歷をもつ（『慶尙道營主題名記』（註⑬所掲）三五六頁）。

⑧④ 『李朝中宗大王實錄』卷九八、三十七年七月乙亥條。

⑧⑤ 李仁榮「攷事撮要の冊板目錄について」附「冊板目錄一」（『東洋學報』二〇卷二號、一九四三年五月）に附す冊板目錄に據る（五四頁）。李氏は、その所藏する（當時）許鈞續撰本を「原本」として目錄の底本に用い、宋錫夏氏所藏（當時）の四本（魚叔權自身の續撰本）を對校に用いている。「三國史」（李氏藏本）は「三國中」とするの著録は魚叔權の續撰本にもみえるため、原撰本にまで遡るとみてよいであらう。

⑧⑥ 前註參照。ただ、許鈞續撰本には別にもう一つ「三國史記」の著録がある。許鈞の増補は慶州のみでも「冠婚喪制儀」以下一九種に及んでおり、調査の徹底によるものと思ふが、この「三國史記」は誤記ではあるまいか（例えば、「三國史」を「三國中」としているが、この「三國中」を「三國史」とは別のものと考えたなど）。後に記す『東京雜記』にも「三國史」の著録があるのみである。

⑧⑦ 安平大君字體訓鍊都監字本。「奎章閣叢書」第七（京城帝國大學法文學部、京城、一九四一年二月）として影印された『攷事撮要』の據用原本がこれである。

⑧⑧ ここでは関周冕刊本（今西龍氏舊藏、天理圖書館現藏、零本、卷三のみ存）に據る。

⑧⑨ 朝鮮群書大系第一三輯（朝鮮古書刊行會、京城、一九一〇年一月）所收活字本は「攷事撮要、刑不用」とするが、誤り

である。「出牧事撮要」とはいつても『牧事撮要』の記載そのままではなく(例えば、『晦齋集』や『九經衍義』などは、「淨惠寺所藏板」の箇所にもえる) 實情にあわせて記した様子が窺える。

89 この間の利用例を一つあげておく。「上之二年乙卯(肅宗元年(一六七五))三月上癸、北崖老人序于揆園草堂」と記す序をもつ北崖『揆園史話』の三、檀君記、に「金富弼、爲仁宗修三國史、而二千載往聖之遺烈、闕而無述……」とある。

90 『順菴先生文集』卷一〇、書、東史問答。

91 安鼎福の舊藏でその書き込みのある『三國史記』寫本が天理圖書館に現藏する(今西龍氏舊藏。零本二冊、卷三二〜四四存)。

92 「丁丑」と註記のある三通のうちのはじめで、彼の在世中(一七二二〜一七九二)の丁丑はこの年のみ。四六歳の年にあたる。

93 『韓國古印刷史』(韓國圖書館學研究會、ソウル、一九七六年四月(日本語版、同朋舎、一九七八年五月))二四八〜五一頁参照。

94 圖版3は京都大學附屬圖書館所藏本(請求記號 5-46/サ/1)。八行目「阿浪」以下四字、九行目「躍入」以下一〇字の缺字は中宗七年刊本では板心のすぐ右にあるが、ここでは行數が多いため板心から離れている。

95 李丙燾譯註『三國史記』(註49所掲)國譯篇の解説に收録する「舊解説」(博文書館、博文文庫本、一九四一年)に「鐫字本は英祖三十六年に印出されたものである」とある。根據は未確

認であるが、前聞恭作氏は「乾隆三十年(英祖四十一年(一七六五))頃の印本なり……年代は在山樓本(前聞氏家藏本)の表紙唐草 史庫入本の年代 奎章閣西序入本の部數等により英祖朝中期以後の末期に近きものと想定す」(前聞恭作『古鮮冊譜』第二冊(註9所掲)六七四頁)としており、あるいはこれらによって確定し得るか。なお、朝鮮光文會發行の『三國史記』(一九一四年三月、京城)の巻頭に「一説、顯宗以後有校書館印本、英祖之時、又有所印而爲第五版云爾」とある。

96 前聞恭作氏は「原本は正德板によらず 其前の本より來れる寫本を基としたりと見えたり」(前註、同頁)とするが、論據は記していない。年代的にみればやはり中宗七年刊本に據ったとみるのがよいのではなからうか。

97 「羸豕孚蹄躅」は『易經』姤にみえる。『三國史記』ではこの直前に「書云……」とあり、それによって「曰」を「云」と改めたのであろう。

98 ただ、高麗王の諱を避けて缺筆していたものを正字に改めることはしているようである(例えば圖版3の四行目にみえる「武」など)。もちろんそれは活字の性格上、當然のことといえるが。

99 李丙燾譯註『三國史記』(註49所掲)國譯篇解説所載「舊解説」(註99参照)四頁。

100 前聞恭作氏は「金富弼の撰本は撰成の後直に刊行せられたるなるべし 中川王紀の註なる名犯長陵諱の文はその原刻のときの迹なるべく 毅宗の朝に公刊せられたりと思はる」とする(前聞恭作『古鮮冊譜』第二冊(註9所掲)六七二頁)。「名犯

長陵諱」とは高句麗本紀第五、中川王十二年條の本文「魏將尉遲」の下に附された分註であるが、その魏將の名が、長陵（仁宗の陵號。即ち仁宗を指す）の諱（楷）と同じであるから記さない、ということである。しかしこれは、板刻を仁宗の次の毅宗代に特定する根據となるものではない。確かに他の高麗王に對しては廟號を用い（例えば、新羅本紀第一二、敬順王九年一二月條に太祖・景祖・顯宗がみえる）、こだけ陵號というのもおかしいが、併用する例もあり（『金誠墓誌』〔朝鮮總督府編『朝鮮金石總覽』上、京城、一九一九年三月。國書刊行會、一九七一年一月覆刻、所收〕に「…及裕陵（睿宗の陵號）即位之三年丁亥……仁廟……とある、問題ない。

⑩『高麗史』卷一七、世家第一七、仁宗三、同日條。なお撰修の経緯については、田中俊明、註⑬論文、を参照。

⑪例えば金斗鍾『韓國古印刷技術史』（註⑭所掲）を参照。

⑫『新唐書』は、嘉祐五年（一〇六〇）六月二十四日に「進呈」され、六月二十六日に鑄板頒行が命じられている（足利學校遺蹟圖書館所藏宋刊本の卷末官銜。尾崎康『宋刊新唐書について』〔『斯道文庫論集』一輯、一九七四年八月〕三八四頁参照）。

⑬『資治通鑑』は元豐七年（一〇八四）進上、後二年して元祐元年（一〇八六）一〇月から鑄板が着手されている（王國維『五代兩宋監本考』〔王戊（一九三二年）二月〕の署名あり）人人文庫、臺灣商務印書館、臺北、一九七六年二月）。

⑭坂元義種『三國史記』と中國史書——いわゆる中國正史を中心に——（時野谷勝教授退官記念會編『日本史論集』、清文堂、一九七五年五月）参照。

⑮高柄翊氏は「三國史記の卷末にある職官名單に」「管勾」という職責の2名の名前が記録されているが、これは編纂と印刷に隨伴する行政的な事務を意味するものと考えられる」とする（高柄翊『三國史記에 있어서의 歷史敘述』、同氏『東亞交涉史的研究』、서울大學校出版部、ソウル、一九七〇年六月〔初出、金載元博士回甲紀念論叢編輯委員會編『金載元博士回甲紀念論叢』、乙酉文化社、ソウル、一九六九年三月〕七三頁）。そこでこの問題について更めて考えてみたい。「管勾」（中宗七年刊本では「管句」。ただし「句」と「勾」は通用）鄭襲明は「右承宣（①）尙書工部侍郎（②）翰林侍講學士（③）知制誥（④）」であったが、それがどの時點のものであるかをまず考えよう。しかし（④）知制誥以外はそうであったことを確認する史料すらなく、次のように推定するしかない。

（1）右承宣（中樞院 正三品）

『高麗史』卷七四、選舉志二に「毅宗」三年五月、左承宣、鄭襲明取詩賦吳光允等十四人……同卷一七、毅宗世家一、三年八月癸酉條に「引見……左承宣、鄭襲明置酒論國事」とある。従って毅宗三年五月～八月およびその前後は左承宣であった。「右」が誤刻などでなければ、左上右下で、これ以前のことになる。なお右承宣から左承宣へ轉遷した例に鄭沆がいる（『鄭沆墓誌銘』、李蘭暎編『韓國金石文追補』〔中央大學校出版部、ソウル、一九六八年二月〕九八頁）。

（2）尙書工部侍郎（尙書工部 正四品）

『高麗史』卷一七、仁宗世家三、二四年正月戊寅條に「王命太子、引禮部侍郎鄭襲明講書大禹謨」とある。従って仁宗二

四年正月およびその前後は除かれる。某部侍郎から某部侍郎に遷る例は多い。

(3) 翰林侍講學士(翰林院 正四品)

『高麗史』卷一七、毅宗世家一、三年四月辛酉條に「〔以〕鄭襲明爲翰林學士」とある。翰林學士(正三品)になったのが毅宗三年四月だから、それ以前である。このような轉進の例に昇中・權適などがある(周藤吉之「高麗初期の翰林院」『東洋學報』五八卷三・四號、一九七七年三月) 参照。

(4) 知制誥(兼官)

『高麗史』卷九八、鄭襲明傳に「仁宗朝、累轉國子司業・起居注・知制誥」とあるのみで上限下限ともに不明。

これらをまとめると、毅宗三年(一一四八)四月以前で(1)前後を除いた(2)ある時点ということになる。そしてこれならば、進上した二三年二月壬戌(二二日)からその一六日後である二四年正月戊寅(八日)までの間に、工部侍郎から禮部侍郎に遷ったとみる必要はあるが、「管勾」鄭襲明の官職が進上時のものであると考えてさしかえないことになる。そこで、進上時に既に板刻されていたとみるならば別であるが、板刻を進上後と考えれば、高氏の意見の一部はなお保留されねばならない。

⑭ 淳熙は宋の年號で、『玉海』のこの卷では書名に年號を冠するのが通例(例えば『崇寧雜林志』)であり、書名とは無関係である。

⑮ 『玉海』同卷には、これとは別に「三國史記 書目 五十

卷、高麗金富弼撰、首載新羅、次高句麗、次百濟、有紀表」ともある。

⑯ 『東國李相國全集』卷三、古律詩、所收。

⑰ 『東國李相國全集』年譜、癸丑・公年二十六の項に「四月、得舊三國史、見東明王事奇之、作古詩以紀其異」とある。

⑱ 『東國李相國全集』卷五、古律詩、次韻吳東閣世文呈諫院諸學士三百韻詩、の分註には「三國史、東京有蛟川」とある(年譜、乙卯・公年二十八の項に「是年著和吳東閣三百韻詩」とある)。

⑲ 劉承幹編『海東金石苑』補遺(一九二一年)、卷五および朝鮮總督府編『朝鮮金石總覽』上(註⑩所掲)四三〇〜三頁、所收。

⑳ 『三國史記』卷一、新羅本紀第一、脫解尼師今九年春三月條。奎章閣所藏寫本(韓國學文獻研究所選編、亞細亞文化社(ソウル、一九七三年九月)影印)に據る。なお『海東高僧傳』については、田中俊明『海東高僧傳』(『韓國文化』一九八〇年六月號、古典名著解題)を参照。

㉑ 『三國史記』卷四、新羅本紀第四、眞興王三十七年條に該當。「安弘法師入隋(陳)求法、與胡僧毗摩羅等二僧迴、上稜伽勝鬘經及佛舍利」とある。

㉒ とりあえず野村耀昌譯「海東高僧傳」(『國譯一切經』和漢撰述97、護教部四上(大東出版社、一九七〇年十一月)所收)の註を参照。

㉓ 末松保和「三國遺事の經籍關係記事」(末松保和『青丘史草第二』(註②所掲)「初出、原題「高麗文獻小錄(三國遺事)」

『青丘學叢』八號、一九三二年五月）・田中俊明、註④論文、
一九・二〇頁、表4・表5参照。
⑩ 崔南善「三國遺事解題」（『啓明』一八號、啓明俱樂部、京

城、一九二七年三月。のち崔南善編『三國遺事』（民衆書館、
ソウル、一九四六年六月）所收）十四、撰成年代。
⑪ 註59参照。

This situation of separation between the Chinese domain and the house of Hülägü began to show changes at the beginning of the 14th century. The seventh Il-Khan, Ghazan, opened, as one part of his financial reforms, the sea-trade with China, and he strengthened the friendly relationships with the Yuan-government. Because of this, the formerly returned 7000 households were again offered to the Hülägü house, and also the several kinds of income from the Chinese domain which had been stored up by the Yuan dynasty for a long time, were again sent to the house of Hülägü.

This article gives only one example of the historical development of the domain system (*fen-feng-chih* 分封制) of the Mongol Empire, but I think it's necessary to conduct more studies of this kind in order to understand the significance of the *fen-feng-chih*-system.

The Woodblock Printing of the *Samguk Sagi* 三國史記 and its Circulation

TANAKA Toshiaki

The *Samguk Sagi* (三國史記) which is the oldest existent history book in Korea has been handed down to the present time, having been printed several times since its compilation in 1145 (Koryŏ 高麗 In Jong 仁宗 23). This article will present the details of its printing, and it will at the same time look into some aspects of its circulation.

The year of the first printing of the *Samguk Sagi* is not clear because it is not mentioned in historical sources but it seems to have been right after its compilation. It is sometimes quoted in other books during the Koryŏ-period, but it is improbable that it had a large circulation.

Two and a half centuries after its compilation, at the beginning of the Yi 李 -dynasty (1394), the first clearly datable printing took place in a prefecture (*bu* 府) in the Kyŏngsang 慶尙 province, the old region of Silla 新羅. After that something more than a century passed, in 1512 (Jung Jong 中宗 7), it was printed in Kyŏngju 慶州 -prefecture, in the same Kyŏngsang-province, by the group around Yi Kye-bok 李繼福,

who was the main official of the prefecture; and this text is the one we are normally using today, the so-called “*Cheng-te* 正德-version” (Cheng-te is a yearperiod of the Ming 明); it will here be called the Jung Jong 7-version. In the middle of the 18th century it was printed for the first time using movable characters and because these characters are identical with those cast for the printing of the *Hyön Jong Sillok* (顯宗實錄), it is called the Hyön Jong Sillok-character-version. Since then, in modern times, there have been many editions published using movable characters, but as for old publications, only these three are known.

As for its circulation in the period, besides sometimes being mentioned in forewords etc. of history books which used this book (Kwön Kun 權近’s *Dongguk Saryak* 東國史略), only a few records are left. Further it is known that the Jung Jong 7-woodblock version was handed down until after the Im Jin 壬辰-war.

If we consider the Jung Jong 7-version which is the text normally used today, we see that it is a rather faithful reproduction of the version at the beginning of the Yi-dynasty, and we can further say that it is near the one of the Koryŏ-period. And so, notwithstanding the fact that as a text it is a new one, its form goes back to the Koryŏ-period, and it is, as was believed up until now, the best text available at present.

On the Ta-han 大漢 State of Ch'en Yu-liang 陳友諒

TANIGUCHI Kikuo

It is a commonly known fact that Ch'en Yu-liang 陳友諒 was a powerful warlord at the end of the Yuan, and that he fought for hegemony with Chu Yuan-chang 朱元璋. However, as for his activities, studies so far are not going far outside the scope described in his biography in the Ming History (*Ming-shih* 明史), and especially concerning the base of his activities one can say that there are hardly any studies investigating that. This article focuses at the same time on his activities and on understanding the bases which supported them, and it has as its final purpose to make clear the reasons why Ch'en Yu-liang couldn't but be